

平成 17 年度日本光学会総会

平成 17 年度総会は、2006 年 3 月 23 日(木)に武蔵工業大学において開催された。

まず、黒田和男幹事長より挨拶が行われたのち、今年度の動向についての説明があった。

会員数は A 会員が 713 名、B 会員が 1057 名、特別会員が 169 口で、漸減の状態が長く続いている。若手会員をいかに増やすかを真剣に考える時期に来ている。そのためには新しい分野を積極的に開拓していくなど対策を練る必要がある。

平成 17 年度に開かれたシンポジウムや講演会は次の通りである。第 30 回光学シンポジウムが 6 月 16, 17 日、早稲田大学国際会議場で開かれた。参加者 数は 298 名と例年通り盛況であった。第 30 回の節目ということで、5 件の招待講演を含む通常の研究発表のほかに、パネルディスカッション「光学の進歩 30 年とその先を読む」が企画された。大変有意義な議論が壇上に展開された。

第 39 回サマーセミナーは 8 月 19, 20 日に前年度と同じく富士教育研修所(静岡県裾野市)にて開催された。参加者は 48 名であった。前年度のテーマが 3D ディスプレイであったが、今年度は「光による 3 次元情報の獲得」と題して 3D 計測をテーマに採り上げた。例年通り、ナイトセッションでは、特別に用意された光学実験に多くが加わり、参加者一同大いに楽しむことができた。

Optics Japan 2005 は 11 月 23~25 日まで、学術総合センター(一橋記念講堂)で開かれた。前年度まで 2 日間の日程で開かれていたが、最近の講演数の増加に対応するため本年度より 3 日間の開催に踏み切った。参加者総数は 945 名を数えた。都心で開かれるという地の利があったとしても、これまでの記録を破る参加者が 集まり大盛況であった。参加者総数が予想を超えたため、多くの会場において収容人数が不足し、立ち見が出たことは反省点であり、次回には適切に対処したい。また、本年度から、若手の研究者を対象に Optics Japan ベストプレゼンテーション賞が新設された。多数の応募者の中から 7 件の優れた講演を選んで表彰した。本年度に関していえば、応募講演は押し並べて質の高い優れたものであった。この賞が若手研究者の研究発表の質向上に貢献するであろうことを期待していたが、確かな手応えを感じた。

第 32 回冬期講習会は「光通信用デバイスの新展開」と題し、1 月 26, 27 日に東京大学山上会館で開かれた。参加者総数は 75 名であった。光ファイバー がいよいよ本格的に家庭に導入される時代を迎え、不況にあえぐ通信業界の現状を打ち破る新たな芽が出つつあることを予感させる、内容の濃いセミナーであった。

他学会との共催事業では、3 次元画像コンファレンスが 7 月 7, 8 日に、カラーフォーラム JAPAN が 11 月 30 日~12 月 2 日まで開かれた。

12 月 16 日には、第 1 回の光応用新産業創出フォーラムが東京大学生産技術研究所コンベンションホールで開かれ、145 名の参加があった。このフォーラムは産学官連携委員会の主催で、同委員会がこれまで取り組んできた産学官連携に関する検討の結果を公表した。

北海道、北陸・信越、名古屋、関西の各地区において講演会が開催された。北海道は、本年度から応用物理学会北海道支部と共催で開かれることになった。本年度は日本光学会が主催す

る国際会議はなかったが、共催の形で2件の国際会議を支援した。

国際連携については、2005年12月で期限が切れる韓国光学会との協定書を3年間延長した。今後、両国の光学会の密なる連携を企画していきたい。また、Optics Japan 2005で招待講演を依頼したSPIE会長のKujawinska教授と、SPIEと日本光学会の連携について意見交換を行った。特に、わが国において学生リーダーを立ち上げることについて、相互に協力し合うことを約束した。この件については今後具体的な案を作っていきたいと考えている。

出版関係では、「光学」12号、「OPTICAL REVIEW」6号をそれぞれ滞りなく発行した。電子出版について、「光学」は準備段階にあり、新規論文のpdfファイル化はすでに対応が取られている。また、過去の論文についても、スキャナーで取り込み、デジタルアーカイブを構築する作業を進めている。現在、Web公開の方法について検討中である。「OPTICAL REVIEW」については、Springer社を通じて、第1巻第1号から最新号までWeb上に公開された(<http://www.springerlink.com/>)。今後は論文の査読、編集の電子化を進めていく予定である。

日本光学会の運営には、応用物理学会分科会担当職員と光学会が雇用した時間雇用職員のほか、多くの幹事や各種委員会の委員がボランティアで携わっている。しかし、近年光学会の活動が広がるにつれて、担当職員や庶務幹事の負担が増えている。このような事態を改善するため、事務の効率化を検討するワーキンググループを立ち上げた。幹事の負担を軽減するよう、具体的な方策を提案し実行して行きたいと考えている。

最後に表彰関係について報告する。光学論文賞は、竹内繁樹氏(北海道大学)と菅谷綾子氏(ニコン)に授与された。日本光学会奨励賞は、花山良平氏(光産業創成大学院大学)と高瀬紘一氏(千葉大学)に贈られた。新設のOptics Japanベストプレゼンテーション賞は、高柳順氏(名古屋大学)、谷澤学氏(大阪大学)、西谷隆志氏(大阪大学)、沼田孝之氏(東京農工大学)、巻田修一氏(筑波大学)、吉澤将則氏(千葉大学)、渡邊恵理子氏(日本女子大学)に与えられた。受賞された皆様に心よりお祝い申し上げますと同時に、今後のさらなる活躍を期待する。また、OPTICAL REVIEW誌の電子化に多大なご尽力をいただいた米田仁紀氏(電気通信大学)、奥平祥子氏(同)に感謝状を贈呈した。

最後に幹事長任期を終了するにあたり、関係各位へのお礼の言葉を述べられた。

続いて、井出庶務幹事(総務)より平成17年度事業報告および平成18年度事業計画、豊田会計幹事より平成17年度決算報告、江口会計幹事より平成18年度予算案が提示され承認された。総会の最後に伊東一良次期幹事長から挨拶が行われた。総会終了後、竹内・菅谷両氏による光学論文賞受賞記念講演が行われた。

なお、日本光学会の平成17年度事業および平成18年度の計画等に関する情報は、第35巻第7号の「日本光学会平成17年度年次報告」の中に詳細が掲載される予定である。